イエスの後に従う者　　**ルカ 23:20～26**

今日から受難週に入りました。金曜日にイエス・キリストの十字架刑があり、次の日曜日にはイエス・キリストは復活されました。聖書は、イエスの死の意味について、「主イエスは、私たちの背きの罪のゆえに死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられました」（ローマ 4:25）と、はっきり教えています。しかし、このみことばが、たんなる知識で終わることなく、私たちの力となり、喜びとなるために最も良いのは、イエスとともにエルサレムに向かった弟子たちや、十字架をめぐってイエスに関わった人物と自分とを重ね合わせてみるのが一つの良い方法だと思います。もし、私が「ペテロ」だったらどうしただろうか。「ヨハネ」だったら、あの人、この人だったたら、また、群衆の中のひとりだったら、と考えてみるのです。そのことによって、イエスの十字架の意味をより深く知ることができるようになると思います。

きょうの箇所には、イエスの他に三人の人物が登場します。「ピラト」と、「バラバ」、そして、クレネ人「シモン」です。一人一人を見てゆきます。

１．先ずピラトです。

「ピラト」とは、ローマから派遣されたユダヤ総督「ポンテオ・ピラト」です。「ポンテオ・ピラト」の名は「使徒信条」に「主は…ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け…」とありますので、私たちはしょっちゅう礼拝の中でその名を口にしています。ただそこには救い主の死と自分の名前とが結びつけられているのは、つまりピラトが兵隊に命じてイエスをひどい目にあわせたことによります。つまり今まで、そしてこれからもピラトがイエスをひどい目にあわせたことが言われるわけです。このことはピラトにとっては不名誉なことでしょうが、確かに事実として彼は、イエスを十字架に追いやった責任がありました。ピラトは、ユダヤの最高議会（サンヘドリンと言います）がイエスを訴え出たのが宗教的な理由であることを知っていました。ですから、そうした訴えにはかかわりたくないと思っていたのです。聖書は、「ピラトは、彼らがねたみからイエスを引き渡したことを知っていたのである」と言っています（マタイ 27:18）。ルカの福音書ではピラトが 3 回も、イエスの無罪を主張したと書いています。「この人には訴える理由が何も見つからない」（ルカ 23:4）、「おまえたちが訴えているような罪は何も見つからなかった。…見なさい。この人は、死に値することを何もしていない」（14、15 節）、「この人がどんな悪いことをしたというのか。彼には、死に値する罪が何も見つからなかった。だから私は、むちで懲らしめたうえで釈放する。」（22 節）とある通りです。イエスが無実であることにピラトは確信を持っているのです。

それなのに、ピラトはイエスを十字架に引き渡しました。なぜでしょうか。聖書には「けれども、彼らはイエスを十字架につけるように、しつこく大声で要求し続けた。そして、その声がいよいよ強くなっていった。」（23 節）と言っています。ピラトは、物事を正しく判断する知性は持っていましたが、正しいことを貫き通す誠実さは持ち合わせていなかったのです。最後には自分の利益になるほうを選ぶような人でした。それで、「人々の声」に負けてしまったのです。

聖書は私たちが犯す罪には 3 種類のものがあると教えています。一つは行動として起こす罪です。分かりやすい罪ですね。人を傷つけたり、盗んだり、だましたりと行いとして犯すものです。第二は心の中で起こす罪です。悪意をもったり、嫉みや、傲慢になったり、人を侮ったりすることなどです。そして三番目には不作為の罪です。すべきこと、やり通さなければならないことが分かっていながらそれをしないことですね。ヤコブ 4:17 に「こういうわけで、なすべき良いことを知っていながら行わないなら、それはその人には罪です。」とあります。ピラトはこの 3 番目にあたるでしょう。

普通、裁判では、事実と法律に基づいて結論が出されるべきで、判決は不当な圧力で曲げられてはならないものです。ところが、イエスの受けた裁判は、民衆の声によって左右された、まったく不正なもので

した。ピラトの時代にはローマの権力は絶対で、ピラトはその権威を帯びていたのですが、ユダヤのようなローマの属国には、総督が不当なことをした場合、それをローマ皇帝に、つまり、ローマの高等裁判所に訴えることが許されていました。ピラトはそのことを恐れていたのです。もし、自分がピラトの立場だったら、どうしたでしょうか？人の声や自分の声しか聞かないで過ちを犯すことがないようにしたいものです。

２．次に「バラバ」ですが、この名は「バル」（子）と「アバ」（父）から成り立ち、「父の子」という意味になります。当時は苗字がありませんでしたから、人々は、「誰それの子」と呼ばれました。例えばペテロは「バルヨナ（ヨナの子）・シモン」でした。ところが、この人は「父の子」としか呼ばれていません。確かに誰もが「父の子」なのですが、この名は、人が本来、神のかたちに造られた「天の父の子」であることを思わせてくれます。子が父の遺伝子を受け継ぎ、父と似たものになっていくように、人は誰しも「神のかたち」に造られ、天の「父の子」となることを期待されているのです（マタイ 5:45）。ところが、人は、その罪のために「神のかたち」を傷つけ、天の父とは似ても似つかぬものとなってしまいました。「バラバ」も名前から言えば「天の父の子」という麗しい名でいながら、神から離れ、殺人犯となって投獄されるまでになってしまいました。しかし、人間は、たとえバラバのように凶悪な犯罪者になったとしても、なお、神の愛の対象であり、悔い改めて「父の子」となることができます。そして、そのために、イエスは、死んでくださったのです。

イエスが十字架にかけられたのは過越の祭のときでした。そうしたユダヤの祭日には、囚人に恩赦を与えるという慣わしがありました。ピラトはその恩赦をイエスに与えようとしたのですが、人々はバラバを赦し、イエスを十字架につけるよう要求しました。もし、イエスがピラトに引き渡されなかったら、バラバが十字架にかけられていたのです。その意味においてバラバほど、イエスが罪人の身代わりとして死なれたという真理を、そのまま体験した人はないでしょう。

人の話を聴かせてもらう時によく思うことは「もし自分がこの人と同じ立場に置かれてたらどうだろうか？」そうしますと相手の話を聞けば聞くほど、もしわたしがその人の立場に立たせられたとしたらすぐに根をあげたことと思います。そしてその大変な中で生きている相手の存在が偉大にさえ思えてくるのです。みなさん　もし自分が大きな試練の中に無いとしたらそれは私が神の目から見て完全なものだからでしょうか？　私はそうではなくてただただ神の恵みとあわれみによるものだと思います。皆さんは自分とバラバとを重ね合わせて、どのような思いに導かれたでしょうか。

3. 最後に「シモン」のことを考えてみましょう。当時、十字架にかけられる者は、自分の十字架を背負って刑場まで歩かされました。イエスも十字架を背負わされたのですが、衰弱しきっていましたので、途中で何度も倒れました。ローマ兵はさっさと処刑を終わらせたかったので、見物人の中から、力のありそうな男を連れてきて、イエスの代わりに十字架を背負わせたのです。それが、シモンでした。

日本では、昔、地方から都会に出てきて、まごまごしている人を「おのぼりさん」と言ったのですが、26 節に「田舎から出て来たシモンというクレネ人」と書かれていますので、おそらく、シモンはエルサレムに来たのははじめてという「おのぼりさん」の一人だったのでしょう。エルサレムで過越の祭を楽しもうとして遠くからやってきたシモンにとって、死刑囚の代わりに十字架を背負うなどというのは、まったく、降ってわいた災難でした。

けれども、このことは彼の救いとなりました。イエスはかつて弟子たちに言われました。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」（ルカ 9:23）と。しかし、十字架の側にまでついて行ったのは母マリアと弟子ヨハネ、またマリアの姉

妹とマグダラのマリアだけでした。他の弟子たちは、蜘蛛の子を散らすように逃げてしまったのです。そんな中でシモンは強制されてですが、十字架を背負って、イエスのあとに従ったのです。シモンは自分が背負っている十字架が何を意味するのか、その時はわかりませんでした。しかし、あとになって、その十字架が、神の御子が人類の救いのためにご自分を献げられたものであることを知りました。マルコ 15:21 には、このシモンは「アレキサンドロとルフォスとの父」と紹介されており、「ルフォス」の名はローマ 16:13 にローマ教会のメンバーとして出てきます。つまりシモンは、一家をあげてキリストを信じる者となり、キリストに従う者となったのです。

十字架をかついで、その重さを自分で体験してみるのはイエスの愛を理解するのに役に立ちますが、イエスが私たちに「背負え」と言われた十字架は、その時だけかついで終わるようなものではありません。イエスは、弟子たちに、「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」と言われました。「日々」という言葉が加えられています。十字架を負うのは、年に一度、レントや受難週だけにするだけのことではなく、「毎日」のことなのです。「毎日十字架を負う」、それは、毎日、自分がイエスの十字架によって罪を赦され、神の子として受け入れられていることを確信することです。「自分を捨て」というのは、自分の考えや判断に信頼したり、自分の努力で赦しや神の愛を勝ち取ろうとするのでなく、ただイエスの恵みに、神のあわれみに頼ることを言っています。自分の人生を無いもののようにするのとは違います。そして、シモンがイエスのあとをついていったように、私たちも、イエスの足跡を、信仰によって、一歩、一歩、歩いていくのです。

イエスは私たちに「ついて来なさい」と言われます。「さあ、自分の力で人生を切り拓け」、「がんばれ」と後ろから私たちを追い立てるようなお方ではありません。イエスは、いつでも私たちの前を歩んでくださいます。苦しみ、悩みの道であればあるほど、先に進んで、道を拓いてくださいます。私たちはイエスの後をついていくのです。シモンはイエスの前を歩きませんでした。きょうの箇所の最後に、「この人に十字架を負わせてイエスの後から運ばせた。」とあるように、うしろをついていったのです。私たちもイエスについていきましょう。イエスに従いましょう。イエスは、従う者を必ず守り、導いてくださいます。イエスの後に従う者であるなら皆、キリストに仕える同労者です。もし問題があったとしてもイエスの後に従っているなら必ず進んで行けるはずです。前にイエス様がおられるからです。ただイエス様だけを前に見て歩んでまいりましょう。